

特集

《サウンドボックス ― 音を捕まえる》について

About SOUND BOX - Catch sound

星 安澄、鈴木 宣也

HOSHI Asumi, SUZUKI Nobuya

はじめに

IAMASと本巣市根尾小学校の連携企画として、2019年12月2日に根尾小学校の「総合学習」の授業内でワークショップ《サウンドボックス ― 音を捕まえる》を行なった。《サウンドボックス ― 音を捕まえる》は聴覚に焦点を当てた音のワークショップである。本ワークショップでは音を捕まえるために、自作の録音・再生デバイス「サウンドボックス」を使用した。本稿では、本ワークショップの内容を振り返り考察する。

サウンドボックス ― 音を捕まえる

連 携 先：本巣市根尾小学校

連携場所：本巣市根尾小学校 音楽室

実 施 日：2019年12月2日（月）13:55-14:40/15:00-15:45

対 象：生徒1-3年生/4-6年生

参 加 者：14名/17名

《サウンドボックス ― 音を捕まえる》は、生活の中に隠れている音を探し出し「サウンドボックス」を用いて音を捕まえるワークショップである。根尾小学校で過ごす中で生まれる、普段は気にすることのない生活音に耳を傾けその音を用いて表現することで、子どもたちが新たなモノの見方と創造力を身につけることを目指した。このワークショップは低学年クラスと高学年クラスの2クラスに分けて行ない、どちらも3部で構成している。以下では、各部に分けて本ワークショップの概要と展開を記述する。

1.「サウンドボックス」であそぶ

子どもたちにはペアを組んでもらい「サウンドボックス」を配布する。サウンドボックスとは自作の録音・再生デバイスである（図1）。約12cm四方の立方体で、手前に録音・再生を切り替えるスイッチと録音・再生する際に使用するボタンが、上部にスピーカーとマイクが内蔵してある。子どもたちにはサウンドボックスの使い方の説明とともにアイスペレイクも兼ねて、互いの声を録音・再生して遊んでもらった（図2）。

子どもたちは楽しそうに声を上げながら遊びだし、最初は「あ〜〜〜」と録音を始めるが、しばらくすると「あああああ!」と大声で録音し再生するたびに笑いが起こっていた。その後、本ワークショップの流れを説明し2部へと移行した。

2.音を捕まえる

2部では生活に隠れている音を探し、サウンドボックスで録音、その後全員の前で再生しどんな音を捕まえたか発表する。日常を異なる視点で捉え直すことで発見があり、それが新たなモノの見方につながると考えたからだ。この作業では自由度が高くなりすぎないように2点ルールを設けた。1つは声を使わないこと、もう1つは音楽室にある楽器を使わないことだ。子どもたちは早速音を探し始める。高学年クラスの探索範囲は音楽室と廊下を飛び越え、他の教室やトイレまで広がった。この作業には本ワークショップの3分の1の時間を割いた。時間をかけるほど思いもよらない音が見つかるのではないかと期待したからだ。実際、ドアを開ける音、黒板にチョークで文字を書く音、教科書を落とす音、上履きで歩く音など様々な音を見つけていた（図3）。発表では、それぞれが捕まえた音がサウンドボックスから流れる。子どもたちは発表のたびになんの音か当てあい、互いの発見を楽しんでいる様子だった。

3.生活にある表現のもと

3部では、2部でみつけた音を用いてオリジナルのリズムをつくり録音、その後全員の前で再生し工夫した点を発表する。リズムをつくることで表現とし、普段の生活に紛れているものが表現に変わること、新たな創造力につながると考えたからだ。子どもたちはそれぞれリズムをつくりはじめる。音は力加減で高低や長さが変わるため、何度も音を鳴らし探りながらリズムを考えていた。発表ではひとつとして同じ音とリズムはなく、それぞれが自信を持って再生し工夫した点を述べていた（図4）。その後、ワークショップを振り返りながら目指したところを伝え、終了とした。

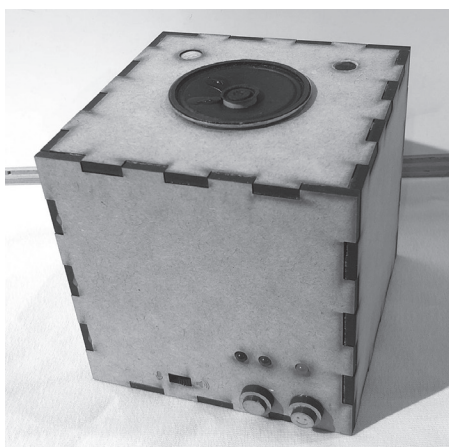


図1 サウンドボックス



図2 サウンドボックスであそぶ様子



図3 音を探しながら録音する様子



図4 発表している様子

かたちが感覚を変える

ワークショップを進める中で、生活の中にどんな音があるか探すはずが生活の中にあるモノでどう音をつくるかに逸れてしまった子どもが数人いた。しかし、そういった子どもたちも自分なりに体験を解釈し「普段気づかないことに気づけた」との感想があったため、ワークショップを通じて目指すところを伝えることができたと言える。

さらに、今後のワークショップに活かすべき新たな発見もあった。それは「デバイスのかたち」である。今回、録音・再生デバイス「サウンドボックス」を制作した。サウンドボックスを配布すると子どもたちは興味津々で、遊びだすと大はしゃぎしていた。サウンドボックスは子どもたちが片手のひらをいっぱいに広げて持てる程度で、多少の重量感もあり、小脇に抱えて運んだり両手で持ちながら録音・再生を行なっ

たりしていた。今の時代、サウンドボックスより小さく軽いスマートフォンやレコーダーで同じ機能があり、むしろより簡単に、高音質で録音・再生を行なうことができる。しかし、今回それらを配布していればここまでの盛り上がりはなかっただろう。デバイスのかたちが、いつもと違う体験をしているような感覚にさせたのではないか。デバイスのかたちが新たに日常を捉え直すきっかけになる可能性があると考えられる。今後はどのかたちや重さがワークショップに最適か考えて制作していきたい。

今後、校舎全体を使って音を捕まえ、リズムをつくり互いの音を鑑賞するワークショップを実施予定である。今回よりも範囲を広げ、子どもたちが根尾小学校での生活を捉え直し新たな表現を生み出してくれることに期待するワークショップをデザインしていく。